

PONTE

ポンテ6月号

特集 ふたりのエリック

エリック・ベイツとエリック・オーベリ 海外ジャグラー独占インタビュー



目次

2...青木直哉 編集長近況

2...そいそい ピザとジャグリングの架け橋 ^{ポンテ} ピザ回しは日本で世界一面白くなる！

4...特集 ふたりのエリック ジャグラーインタビュー

16...編集部より

編集長近況

月刊ペースと決めてから初めての発刊。見た目はほとんど変わらず、発行「遅刻」もするし、相変わらずの調子。ですが今回は特集として、海外ジャグラー、二人の「エリック」インタビューを載せています。お楽しみください。その前にまずはいつものピザ記事から。

ピザとジャグリングの架け橋

ピザ回しは日本で世界一面白くなる！

そいそい

以前、本誌通巻第四号に「ピザ回し界というのが、日本という土壌で、多様性という面で今一番面白くなりつつある」と書いていたのだが、その後この一文について補足する機会を今まで逸していたので、そのことについて書かせてもらうことにしよう。なぜ、ピザ回しが日本で世界一面白くなるのか？

まず、日本の外で行われているピザ回しについて見てみよう。競技人口は、自国に世界大会を抱えているイタリアとアメリカが特に多い。YouTubeにはこの二つの大会に関する動画が沢山ある。そこで以下に挙げる二つの方法で検索すれば「ピザ回し」という営みが何を指し示すのかが分かるはずだ。

①まず、イタリアとアメリカの大会の名前を検索して動画を見る。イタリアは“Campionato mondiale della pizza”でアメリカは“World Pizza Games”。

②イタリア語と英語で「ピザ回し」に相当するフレーズを検索する。

イタリア語では“Pizza acrobatica”と言い、英語では Pizza + spinning, twirling, acrobat, freestyle etc.(Pizzaの後にスペース、そしてその後に列挙したフレーズの一つを入れてみる)と言う。

以上の方法で動画をそれぞれ5本ほど見てもらえれば、今日「ピザ回し」と名指されているものが何を示すのか分かると思う。大会のピザ回しから店先の余興まで、さまざまである。が、しかし技術的には（少なくとも経験者から見れば）皆ほぼ一樣なのだ。やっている人もほぼ

ピザ職人。世界大会が自国にあるイタリア・アメリカは、ピザ文化の中のピザ回しとして定着させることに多大な貢献をしたが、それと同時に競技としてのピザ回しのレベルもある一定までのものとしてそれを「世界」レベルに規定した。

一方で日本はどうだろうか？

日本におけるピザ回し文化は初期から現在に至るまで輸入されたもので、大会は「作る」ものでなく「参加する」ものである。90年代後半にはすでにアメリカから練習用ラバーを取り寄せて『オールド・ヒッコリー』というレストランでピザ回しを余興としてやっていたようだ。イタリア大会やアメリカ大会に参加する人もおり、近年では両大会で入賞する人も出てきている。が、しかし日本国内では権威づけられた大会がまだ存在しない。それがいい。権威づけられた大会がない、ということはピザ回しにおける基準がない、ということであるが、上限もまた規定していないということ（ピザ回しはこれだ、という偏見がないということ）である。日本はこうした「世界」がこしらえた権威に挑むことも、権威から離れた一番自由な視座を得てプレーすることも可能ということだ。

さらに、ここ二、三年で面白い事が起きている。それはピザ回しとジャグリングの出会いだ。日本は世界のピザ回し界の中で類を見ないほどジャグリングとの距離が近い国。僭越ながら自分自身もジャグリングという広大な世界にお邪魔させていただいており、ジャグラーの各道具に関する可能性の模索の姿勢に毎回驚かされている。こうして、ピザ回ししかしてこなかった人間がジャグリング界に入って来ることで、あるいはジャグラーがピザというものに触れることで、ピザ回し界では今までなし得なかった（そしてジャグリング界では当たり前のように行われている）他道具、あるいはパフォーマンスとの相対化が可能になりつつある（ピザ回しと他の道具との相対化のささやかな成果は本誌通巻第四号を参照のこと）。

というわけで、日本のピザ回しはまだ未成熟ではあるが、だからこそ権威に頭を垂れることなく、ジャグリングや他のパフォーマンスの発想も取り入れながら発展する可能性があり、非常に面白くなると自分は思う。

それこそ、出来合いの「世界」に縛られない、日本でしかできない数段階進んだフリースタイルとしてのピザ回しなのかな、と勝手に想像してみる。

☆告知

代々木公園で月一回を目安にピザ回し練習会を開いています。今年は4月27日、6月1日に実施しました。初心者向けのピザ回しの始め方ワークショップと経験者向けのワークショップなどそれぞれ準備していますので、気軽にお越しくださいませ。

今回は七月の上旬あたりにしようかと思っています。詳細は以下のブログで確認してください。もしくはツイッターアカウント @SOYx2 で随時情報を更新していきますので、チェックして頂けると幸いです。

ブログのリンク

<http://pizzasoyx2.blogspot.jp/>

特集 ふたりのエリック



Eric Bates (the U.S.)

photo=Naoya Aoki

エリック・ベイツと、エリック・オーベリ。
共にその名を知られるふたりのジャグラーに、
ジャグリングのこと、自身のことをいろいろと、聞いてみました。



Erik Åberg (Sweden)

photo=Daigo Itatsu

ふたりのエリック ①

エリック・ベイツ のこと。

彼がシガーボックスを扱うと、すっかり手に収まっており、まるで異なる道具に見える。

大道芸を観に行っても、どこからも全てが見渡せるような身長190cmはあろうかというエリック・ベイツ氏は、ジャグリングの世界でも珍しい、シガーボックスを使ったコンテンポラリーサーカスを仕事としている。



photo=Naoya Aoki

セブン・フィンガーズに出会うまで

---ジャグリングを始めたのはいつ頃ですか？

ベイツ 人生、常にジャグリングをしてるようなもので、覚えている限りで、ずっとジャグリングをしている。9歳くらいの頃から既にファイアトーチでジャグリングをしている写真がある。夏に、短期でパフォーマンスをしたりもしていた。勿論、子供だから、そんなに本格的なものじゃなくて、市場で披露する、とかその程度のものだけだね。

大学に入っても、ユースサーカスキャンプに行ったりしていた。ニューイングランド（アメリカ東海岸）をツアーしたんだ。当時大学では経済を勉強してたんだけど、まあ、周りから見たら、「君はサーカスを経営する方じゃなくて、どう見てもサーカスにいる方の人だよな。」と言われて（笑）で、それもそうだと思って、21歳で大学をやめてモンリオールのナショナルサーカススクールに入って、三年間サーカスを専門に勉強して、卒業してからはプロとして稼ぎ始めた。

---セブン・フィンガーズにはどうやって出会ったんですか。

ベイツ その頃、友達がセブン・フィンガーズと一緒にシェアハウスみたいな形で住んでいたんだ。今の僕以外のメンバー7人全員が。それで、ある時バーベキューに呼ばれてね。その時は、セブン・フィンガーズなんて知らなかったんだよ。でも逆にそれが良かった。一緒に水遊びをしたりなんたり、彼らとの交流を、ただの「友達」から始められたから。サーカススクールに入って最初の夏に、一緒に単発のプロジェクトをいくつかスクールの合間にやり始めて、仲良くなって、卒業後には、「どうせなら一緒にやらないか」ということで、当然のように共に働き始めた。シークエンス8に出ている人たちは、皆サーカススクールの同期なんだ。

サーカスという人生

---日々の暮らしはどのような感じですか。

ベイツ モントリオールに一応家はあるんだけど、今はツアーをしていて、ほとんど行ってないな。3週間くらいしか滞在してない。日本人のシガーボックスジャグラーがカナダに尋ねて来たときもあったけど、彼らと同じくらいしかあの家は使ってないよ（笑）

僕らはみんな、ツアー中はホテルで自分の部屋で生活してるんだよね。だって、いつも一緒に旅をして、練習して、ショーをするんだよ。そこに来て一緒に生活なんかしたら、喧嘩が絶えなくなっちゃうからね。

大体、ショーをする町に着くと、まず舞台のチェックをして、ご飯を食べて、ショーの前には2時間くらい練習をして、メイクをして、パフォーマンスをする。それか

ら夕飯を食べて、2時くらいにホテルに帰って来て寝る。こんな生活だよ。

でも適度な距離を保つというのは、やっぱり、大事なね。

---プロのジャグラー、パフォーマーとして生きていて、苦しいのはどういう所ですか。

ベイツ ジャグリングっていうのは、安定を求められない。それがもう本当にイライラするよ。本当に。

練習をせずに本番に臨んでノーマスで終わるときもあれば、本番前に3時間くらい練習をして、ミスばかりするときもあるし。

例えば、ロシアン・バー（しなる棒の上でアクロバットをするもの）。僕らは、本番でこれで6つしかトリックをやらない。これはね、本当に簡単なんだよ。ほぼ確実に、しっかり技が決まる。

でも、ジャグリングっていうのは、少し呼吸のタイミングを間違えただけで、ミスしちゃうような世界じゃない。中には、いつだって完璧なショーをするジャグラーだっていないことはないけどさ、僕もそうだったらよかったけど...（笑）だからこれが一番辛いことかな。でも、その苦しみに見合うものでもある。

でも重要なことは、自分の調子が悪くても、上手くいくように努力はする、ということだよ。誰だって間違いはする」ということを受け入れる。イライラせずに、誠実に頑張る。観客だって、パフォーマーには成功して欲しいと思ってるわけだからね。これは、いまだに、毎日身に染みて思うこと。

サーカス学校が与えてくれるもの

---あなたは、カナダの名門サーカス学校であるナショナル・サーカススクールを卒業していますが、サーカスの技術を学ぶのに、サーカス学校は必要だと思いますか？
ベイツ これは面白い質問だね。

必要、ではないと思うよ。ただ、とても役に立つものではある。

まず、サーカス学校では練習に専念できる。一日に8時間練習して、しかもたとえばそれが週5日、ジャグリングをしたり、ダンスをしたり、歌を練習したり、アクロバットを練習したり、色々なことをする。夜は、フランス語の授業もあったりする。しかも誰か見てくれる人がいる。これと同じことを一人でやるっていうのはとても難しい。

あとは、様々な種類のサーカスアートに触れられて、身近に感じられるところも良い。練習をしている最中に、隣で、棒からぶら下がっている人がいたり、9ボールをやっている人がいたりするわけだよ。サーカスというものの実態を感じられると同時に、自分が何をやっているのかということが分かる。

あとは、様々な種類のサーカスアートに触れられて、身近に感じられるところも良い。練習をしている最中に、隣で、棒からぶら下がっている人がいたり、9ボールをやっている人がいたりするわけだよ。サーカスというものの実態を感じられると同時に、自分が何をやっているのかということが分かる。

あとは、サーカススクールに行くと、色んなショーを観に行く機会があるんだよね。それで、サーカス業界の人ともたくさん知り合う。そうすると分かることがいっぱいある。たとえば具体的に、ああ、あのドイツのキャバレーで働いてみたいな、とか、「いかにも」なサーカスで、動物と一緒にやったりするようなのは嫌だな、とか、そういうことが見えてくる。サーカスの社会をより理解できる。

お金のやりくりに関しても学べることはある。サーカス学校に入る前は知らなかったけど、たとえば、カナダでは、少人数でサーカスを一からやるのは財政的に言って、とても難しい、とか。シルク・ドゥ・ソレイユとか、エロワーズとか、セブン・フィンガーズもそうだけど、大きいサーカスカンパニーが主流なんだよね。カナダでは。ツアーをやって、給料もショーの演目ごとにもらえたりするのが普通だ。一方ドイツだと、たとえば、キャバレーが主で、ツアーというのはあまりなくて、その日ごとの賃金だったりする。

フランスだったら、政府の補助なんかがあって、3人でショーを作りたかったら、実際、やる気があれば可能だ。そういう風に、国によっても違いがある。サーカス学校にいればこういうことが分かるんだ。

じゃあ学校が絶対に必要か、という話をすると、ea eoっていうカンパニーは知ってる？

彼らは、すごくカッコいい、新鮮なジャグリングをする。でもサーカス学校には行ってないんだよ。

ジャグリングのショーは、ともすると、ジャグリングに過剰に重点をおいたものになってしまいがちだ。僕にしてみれば、ジャグリングを舞台の上で面白く見せるため

には、身体の動きやストーリーが絶対に要る。簡単じゃない。それでも、ちゃんとプロになるための学校に行かなくても、そういうことを成し遂げている人たちがいるんだ。これは、学校は必ずしも必要なものではない、ということを実証していると思うな。

でも、あれは例外的で、学校なしでここまで行くのは、とても難しいとは思うけどね。

パズルのように演技を「作る」

---ショーを作る時は、普段はどういう風に作っているんですか？

ベイツ まず曖昧なイメージから始まるのが普通。たとえば、「机を使ってみよう」とか、その程度のね。男が地下室にこもって、夜中に工具を使ってる、みたいな、イメージだよ。実際にはシガーボックスをやるわけだけど、頭にはそういうイメージがある。

インプロは非常に頻繁に使っている。ほとんどの動きは、音楽に合わせたインプロから生まれてる。たとえば机のアクトにしても、ホテルの部屋の机の前にカメラを置いて、音楽を流して自分が感じるままにやってみて、映像を見ながら「これはダメ、これもダメ、...これは、カッコいな！」とか、実験している。「この視線の動かし方はナイスだな」とかね。

5分間ジャグリングで何かを演じるとなったら、それは、5分間与えられて、何かのストーリーを語れる、ということ。

そのなかに、パズルみたいに演技を詰め込んでいくんだ。技を入れるタイミングにしたって、自分で、ちょうどいいタイミングを見つけていくわけだしね。ダブルピレットをどこに入れるか、この難しい技をどこに入れるか、ここで右に動きたいな、とか、そういう細かい部分はまさにパズルだよ。...僕はそういう作業は好きではないんだけどね（笑）。まあ、なんでもかんでも、勝手に出来上がって行くわけじゃないからね。

チームで作るときでもやることは同じ。インプロをいっぱいやる。皆で、振り付けの案を出し合って、いいと思ったものを皆で覚える。でも結局いっぱいやっても、実際に使われるのは一つか二つだったりもする。

音楽がそこに加われば、また、変わってくるよね。盛り上がる箇所に合わせて動きを変えてみたり、逆に音楽の方をいじったりもする。僕は音楽をいじるのは得意ではないけど、セブン・フィンガーズがやってくれる。音楽を付けないというのも一つの選択肢だよ。

---音楽というと、どういう風に演技に使う音楽を見つけていますか？

ベイツ まあ、僕が好きな音楽っていうのは、演技に使えるような音楽じゃないからねえ（笑）

部屋でクラシックとか、聴かないような音楽を聴きながら、選んでるよ。あとは、合わせてインプロをしてみたりとか。

音楽に完璧にマッチした演技、ってあるよね。僕はそれを見るのが大好きで、すごくカッコいいと思うけど、やるのは嫌だな。まるで、音楽に束縛されているみたいじゃない。どちらかというと、音楽が与えるフィーリングが僕にとっては大事で、それに合わせて演技をする。余裕を持って、観客とコンタクトを取れたり、ドロップをしても、それをネタに出来るくらいの間隙がある方が良い。

---ジャグリングのショーの中での、ジャグリング自体と、それ以外の表現のバランス、ということについてはどう思いますか？

ベイツ そうだねえ...難しいねえ、すぐに答えられるようなものじゃないけど...（笑）

ああ、でも、僕らがやっているのは、やっぱりサーカスな訳だから、絵描きが自分の持っている色で自分の表現したいことを表現するように、サーカスの技術を使って何かを言うわけだ。

それで、サーカスの何がいいところかっていうと、サーカスアートっていうのは、こう、爆発的な色（explosive color）を持ってるんだよね。たとえばダンスだと、クライマックスに持っていきたくて、ド派手なことをしたい、と思っても、それができない。一方アクロバットだったら、たとえば連続バック転が出来る。

何かを共有したいな、と思った時、人の心を動かした
いな、と思った時、それに見合った衝撃を観客に与える
のが大事なんだ。じゃないとつまらない。素晴らしい技
術というのは、それを可能にする魔法なんだ。

恋をした時とかさ、おばあちゃんが死んじゃったと
か、なんでもいいけど、そういうことと同じだよ。何か
を心で感じるには、それほど、大きい出来事が起こらな
いといけない。

バランスということ言うと、その、「高い技術」と、
「美しく、何かを表現できる技術」ということの balan
スが、大事なんだと思う。観客にパンチを与えて、同時
に、何かを伝える。それで、観客が、サーカスと自分
中の何かを結びつけて何かを感じ取れたら最高だなと
思ってるよ。それは僕の目指している所だね。

エリック・ベイツのこれから

---自身のことで、もっと向上させたいと思っ
ていることは何ですか？

ベイツ もっと自分の判断を信じられるように、
いい判断をできるようになりたいかな。

自分が想像している「いいもの」と、舞台の上で、
本当に「よく見える」ものってというのは、二つの全く違
うことじゃない。夢と現実、みたいなさ(笑) 想像の中
では、もう、最高の技なんだよ。でも実際にやってみたら、
目も当てられないようなものだったりすることって、あ
るでしょ。だから自分が考えていることを、実際に実行
するときの判断力を上げたい。これはシークエンス8の
創作の過程についても言えるんだ。6ヶ月間くらい、皆
で考えて色々作って、最終的に出来上がるものは、作る
前に想像していたのとは全く違うものになっているんだ。
だから、どうしても、頭で考えていることと、実際に
出来上がるものには、差があるんだよ。

それでも僕が目指しているものってというのは、こうだ。
自分自身から自然に湧き出る感情でやって、かつ自分が
頭で伝えたいと思っ
ていることを、伝えることが出来
ている、ってということ。

たとえば、その時に楽しんでインプロをしているんだ
けれども、かつなんだろう、環境問題について何かを語っ
ているとかね。それか、コーヒーについてだか、分から
ジャグリングのことばのために

ないけど、とにかく、動きとして美しいんだけど、それ
でもなお具体的に何について表現したいのかが伝わって
来る、という。

かつてのジャグリングとYouTube

---なるほど。ところであなたは日本語にも興味を持
って勉強してるようですが、日本のジャグリングとの初
めの出会いはなんだったか覚えてますか？

ベイツ あれは、竜半のYouTubeビデオだったかな。それ
と、DEEP JUGGLINGというサイトがあっ
てき。二つのうちどっちかだったな。

---ああ、DEEP JUGGLING,セバスちゃんさんですね。

ベイツ そういう映像を見て、刺激を受けて、今度は何
かを付け足して、逆に技を見せてくれた人に挑戦する、
みたいな相互作用はとて
もいいものだと思う。僕がシ
ガーボックスを真剣にやり
始めた頃、他のシガーボ
ックスプレイヤーとの接
点はインターネットくらい
だったよね。---じゃあ
逆に、YouTubeの悪い所
って何だと思いますか？

ベイツ うん、これもね、面白いよね。ちょうどこの
間フランソワーズ・ロシエ
(Françoise Rochais 7
バトンカスケードをは
じめ、卓越した技術を持
った女性のジャグラー)
とこれについて話した
んだよ。

YouTubeみたいな映像だと、それが絶対にいつも舞
台上で成功する技なのか、それとも、単発の、お遊
びの一発技なのかって
いうのが、分からない
ときがあるでしょ。
ところが、フランソワ
ーズ・ロシエとか、ア
ンソニー・ガットー
とか、フランシス・ブ
ランとかになると、彼
らができる技って
いうのは、それこそ、
10回やったら10回、
...いや、まあ9回
くらいかな(笑)と
にかく、ほぼ完璧に、
舞台上で成功する
技なんだよ。カメラ
の前で何十回挑
戦して、やっ
と一回できる技と、
舞台上でコン
スタントに
できる技、
の間には、何
十年だか分
からないく
らいの練習
の歳月の
差がある。

YouTubeのおかげで、ジャグリングの世界全体の進歩は
速くなったよ。それは、山道と一緒なんだ。一番始めに
そこを歩く人は、どこに行ったら良いかも分からない状
態で、一生懸命木の間を歩いて行く。色んな余計なもの

に時間を取られながらね。でもあとからついてくる人は、どういう道を通れば良いかも知っている。だから、10歳の子供が4ディアボロをやっていたりするわけだよ。

でも、フランソワーズ・ロシェがジャグリングを始めたときには、彼女が唯一知っていた「ジャグリングをしている人」が、オーストラリアにいた人で、彼に手紙を書いて情報を交換していたっていうんだからね。それで、15歳くらいの時にシルク・ドゥ・ドゥマンに出ちゃうみたいだね。僕はそういうのをすごくカッコいいと思うし、同時にYouTubeの悪い所はそういうことに関係があるかもしれない。自分自身で道を発見していくことが難しくなっている。

カジュアルにジャグリングを楽しんでいる人と、パフォーマーとは、違うわけだよ。ただジャグリングを楽しんでいる人が、10回中9回、技を成功できる必要はない。

これは少し違う話かもしれないけど、ジャグリングの特異な点は、みんなシェアするのを喜ぶって言う所。たとえばエアリアルだったら、誰も映像をインターネットに置かない。それは、アイデアそのものがとても大事なものである。そのひとつのアイデアを得るために、何時間もインプロをしたり、頭を悩ませたりしている。技術的な部分は、下手な話、一日でも習得できちゃったりする。その点は、ジャグリングと随分違う所だ。ジャグラーは教えるのが好きだ。

だからこんなこともあった。ショーを見ていたときだったんだけどね。ディアボロで有名なシャープ兄弟の、ひとつ前の演技で、全く同じような技を他の人がやったんだ。きっとYouTubeで見たことがあったに違いない。でも、別にそれでも良いんだよね。ただ、大事なのは同じ技をするんだけど、自分のやり方でやるっていうこと。

ジャグリングって本当に魅力的だなと思うのは、少なくとも僕は10年以上はシガーボックスをやってきたわけだけど、それでもまだ、YouTubeを見て、たとえばJINが見たこともない技の数々をやっていたり、一つだけ箱の向きを変えるだけで、そこにまた無限に近い技の数々が生まれるっていうことだよ。そういうものを観る機

会を提供してくれるという点では、YouTubeはいいものだと思う。

日本のジャグラーへ

---最後に、日本のジャグラーに何か言いたいことはありますか？

ベイツ とにかく、ジャグリングを楽しんで欲しい。自分が好きなスタイルで。あとは、日本のライフスタイルだからしょうがないのかもしれないけど、日本では仕事というのがとても重要で、ものすごい時間をジャグリングに費やしたのに、社会に出てからきっぱりやめてしまう、みたいな人がいる。

これが僕には、悲しいし、信じられないんだ。だから、せっかくだから、ジャグリングを楽しむことをずっとやめないで欲しい。

---ありがとうございました。では、コーヒーも二杯飲み終わったことすし、行きましょう。 ■

(構成・文＝青木直哉)

エリック・ベイツ Eric Bates カナダ発のサーカスカンパニーであるセブン・フィンガーズで活躍中のシガーボックスジャグラー。2014年5月現在、「シークエンス8」という演目のツアーを世界各地で行っている。アメリカ、バーモント州出身。26歳。ルーク・バラージが毎年YouTube上で開催しているジャグラートップ40にも選ばれる、近年知名度を上げている若手パフォーマーである。2014年5月、パフォーマンスのツアーの合間をぬって旅行で日本を訪れており、取材を行うこととなった。この後、一緒に代々木公園に出かけ、関東シガーボックス練習会に行きました。表紙の写真、本記事の冒頭の写真はその時のものです。

・セブン・フィンガーズ：<http://7doigts.com/en>

・エリック・ベイツ：<http://ericbates.com>

ふたりのエリック ②

エリック・オーベリ のこと。

卓越したジャグリングの技術だけではない。
素晴らしいデザインセンス。
湧き出すアイデア。
そしてゆったりした喋り方と、ほんわかオーラ。
北欧のジャグラー、エリック・オーベリ。
あまり表に出ることのなかった彼の仕事のこと。
デザインやジャグリングに対する考え。
なぜ今までインターネット上で映像を出してこなかった
のか。
ぜんぶ、聞いてみました。



photo=Daigo Itatsu 左：エリック 右：編集長

ジャグリングの仕事のはなし

---今回初めての来日ではなく、2007年と2012年にJJFのゲストとして来られていますね。2007年の時は、シューボックス・ツアーと称して来ていましたが。

オーベリ うん。最初の公演はアメリカで2006年に始まりましたね。アメリカとアイスランドでそれぞれ3回。

---なぜアイスランドなんですか。

オーベリ ジェイ・ギリガンがアイスランドをとて気に入っているからです(一同笑)。アイスランドに、クレイジーな友達がたくさんいて。そしてジェイもご存知の通りクレイジーでしょう。クレイジーな仲間たちとジェイ

ジャグリングのことばのために

が相談して、3回もツアーをやることになった。ジェイ個人に関して言えば、少なくとも10回は訪れてますよ。今年の夏には、ジェイコブ・シャープ (Jacob Sharpe) と公演をしていますね。あ、そうそう、アイスランドの人々ってパフォーマンスに対してとてもオープンなんですよ。

---というところ？

オーベリ たとえばショーをギャラリーでやるとすると、宣伝もなんにもしないんですよ。

でもギャラリーの人が「みんなー、五時からパフォーマンスやるぞー」って声をかけると、人がちゃんと群がって来るんですよ(一同笑)。信じられないです

ジャグリング「以外」の仕事のはなし

---ジャグラーとして活動する他に、どのような仕事をしているのでしょうか。

オーベリ 2003年にサーカススクールを卒業して、それ以来色々な仕事をしてきました。ほとんどパフォーマンス関係でしたが、一番最初は、プロダクション・カンパニーを立ち上げました。

---プロダクション・カンパニーとは？

オーベリ 劇場で使う小道具などを製作する会社で、「サロン・ジラフ」という名前。2004年から2010年まで続けました。月に一回くらい、ショーの製作を手助けするんですね。

今は、美術館での技術者をしたりもしています。

---美術館の技術者、というところ？

オーベリ 棚の並べ方とか、照明とか、インスタレーションに関する技術者です。配置を考えるというよりは、どちらかというと、具体的な製作の方に関わっていますね。未だに年に2、3回くらいはそういう仕事をしていて、実は今回日本に来たのも、その仕事があるからです。沖縄で、展覧会を製作するので。ノーベル賞受賞者に関するもので、ジャグリングは関係ないですが。

ジャグリングの歴史を探る意味

---ジャグリングの歴史の研究もなさっていますよね。

オーベリ 2007年に私は、ベルリンに住むカール・ハイ
ンツ・ツィーテン(Karl Heinz Zietzen)というジャグリング
の歴史家に会いました。その時、ちょうどジャグリング
の歴史に興味があったので、私はいろいろな質問をぶつ
けました。彼はジャグリング史について数冊本も書いて
いるんです。彼との出会いから、私も次第にジャグリン
グの歴史について考えるようになっていきましたね。当
時は出来る限り頻繁にベルリンに彼に会いに行きました
し、今でも電話をしたり、交流を続けています。

それで研究を初めてしばらくしてから、あることに気
がつきました。それは、今日のジャグリング文化と、ジャ
グリング史の知識との結びつきが、非常に希薄だ、とい
うことです。

これはどういうことかという、たとえばもし建築や
絵画を学ぶ人がいるとして、ピカソを知らない画家なん
ていないですよね？建築家にしたって、パツラーディオ
(Andrea Palladio)のようなイタリアの古い建築家を知らない
人はいない。もし美術や建築を学校で学ぶ場合、必然
的に美術史や建築史について勉強をします。

だけどジャグリングに関しては、そうではありません。
ジャグラーならラステッリ(Enrico Rastelli)やチンクエ
ヴァッリ(Paul Cinquevalli)のような名前は耳にしたことが
あるかもしれませんが、ラステッリが何をして、どのよ
うにジャグリングに影響を与えたかまでは知られていま
せん。仮にラステッリの名前を知っていて、YouTubeでい
くつか動画を見たことがあったとしても、彼が何をした
のか、今自分がやっているジャグリングに、どのような
影響を与えたか、ということまでは理解していないので
す。ラステッリと自分の関係性については不明というこ
とです。

私がジャグリングの歴史を探求しながらやろうとして
いるのは、このことで、ジャグリング史と、現在のジャ
グリングの文化を陸続きのものにしたい。

それから歴史の研究の中でもうひとつ気づいたことが
あります。ジャグラーが道具をお店で買えるようになる
以前、道具は全て自作されていたであろう、ということ
です。そして私はこれを自分でやってみたくなりました。

この時に、ジャグリングの歴史研究と、道具を自作す
るというアイデアと、自分がサロン・ジラフとして劇場
ジャグリングのこぼのために

で働いていて小道具の製作をしていたこと、が一挙に結
びついたんです。つまり手作業の「道具を製作する」と
いう過程と、頭を使った、「ジャグリングの歴史研究」
といったような作業が組合わさった結果、今の私の成果
となったんです。

ゴーストキューブは「人形師」の構想の結果である

---そういえば“Ghostcube”という、あなたが作った、立
方体が組合わさった不思議な道具を操るYouTubeのビデオ
が、ジャグリングのみならず、デザインの分野でも非常に
話題になっていますね。

オーベリ アイスランドで操り人形をやっている方を訪
問したことがあります。その人形師の方は人形を「自作」
していました。一方ジャグラーの私にとって、道具とは
「購入」するものでしかありませんでした。双方を比較
してみると、私には「制作する」という過程がなかった
わけです。そこで「もしジャグラーがこの人形師のよう
に仕事をしたらどうか？」ということを想像しました。
人形師のような芸術の過程を経ていくジャグラーとい
うことです。

そんな風に考えていた矢先に、YouTubeで、折り紙を
使った可動式の立方体の動画をみたんです。それがきっ
かけでゴーストキューブが出来ました。

今までの「沈黙」の意図

---公式ページもできたり、動画も出したりと最近に
なってようやくインターネットでの露出が増えてきたよ
うですが、それはなぜですか？

オーベリ たとえばYouTubeで動画を作るといった場合、
その場でパフォーマンスしたのを撮影してアップロード
するだけでもいい時代になりました。非常に簡単で、い
いことです。ですが同時に動画の質が下がるということ
も意味します。私は何かを世に出すなら、高い品質のも
のを出したい。だから時間をかけて準備をしないととい
けない。ですが私は他にもやる事がいっぱいあります。
だから出せないんです。

多くの人が、「自分を見て!」というような動機で、すぐに動画を上げたりします。ですが私は特にそういうことを欲しない人間なので(笑)それよりは、もっときちんと考えて、これをこういう風に作って、こうプレゼンテーションしたら、皆面白がってくれるだろう、ということを考えて作る方なんです。明確な意図が無い限り動画を作らない。

別にYouTubeの動画が嫌いなわけではない。”Japanese Jugglers”シリーズとか、JJFの映像など、評価しているものもあります。(編集部注:ですがどちらも日本人が作った動画ではありません...)もし時間があるなら、私だって、YouTubeにもっといっぱい動画を載せたいんですよ。

では何故今「ゴーストキューブ」を発表したのか。

今まで私自身の存在が知られていなかったわけではないですが、私が手掛けてきた道具、これに関しては、ほとんど未知でした。それで、もしゴーストキューブを発表したら、面白がる人もいるだろうし、パフォーマンスをして欲しいと思う人もいるかもしれないし、何らかの明確な反応があるかもしれない、と期待できたんですね。だから、この動画に関しては、これを作るだけの動機があったんです。

北欧とジャグリング

---先日あなたのウェブサイトを見ました。箱に入れて背負って持ち運べる自転車、なんてものまでデザインされているのには感動しました。そのデザインが実に北欧的だと思ったのですが、ジャグリングにしても、どこか北欧的な要素を感じます。

オーベリ (しばらく考える) ...そうですね、私のジャグリングは北欧文化や北欧的な考え方に多分に影響されていると思います。なんといっても、私は北欧出身ですからね。それからは逃れられません。

---北欧のジャグリング一般はどのような経緯で出来上がったと考えていますか?

オーベリ 趣味としてのジャグリング、EJC、それとサーカス学校という要素が1980年代から90年代初頭にかけてミックスされて、ヨーロッパのジャグリングが出来ます。

北欧は北欧で、異なったジャグリングを形作っていきました。その黎明期に影響力があつたのは、たとえばヴィレ・ワローやマクシム・コマロ、ジェイ・ギリガンなどのようなピーポットジャグラーたちです。そのほかにもサカリ・マンニスト(Sakari Mämmistö)なども有名でした。今でこそなぜ彼が影響力があつたのだろう、と思われるかもしれませんが、彼は誰よりも早く現在のジャグリングに連なるスタイルを開発していたんですよ。さらにピーポットジャグラーやサカリ・マンニストと並んで、マツキネンというジャグラーも北欧のジャグリングに影響がありました。

スウェーデンでは、デフラクト(Cie Defracto)というカンパニーのミン・タム・カプラン(Minh Tam Kaplan)という人物が影響力がありました。シルクス・シルケー(Cirkus Cirkör)というスウェーデンの大きなサーカスに所属していて、白いシリコンボールを使って、踊るようなジャグリングのスタイルを始めました。これがスウェーデンのジャグラーに大きな影響を与えたのです。

しかし、今でこそ「北欧」スタイルと言う風に認識されていますが、実際にはフィンランドが起源だと思います。スウェーデンでもノルウェーでもなく。それが、他の北欧のジャグラーを経由して、私もその一人ですが、次第に「北欧」のスタイルとして認識されるようになったのだと思います。

サーカス学校について

---良いパフォーマーになるためにサーカス学校は必要だと思いますか。

オーベリ いいえ。

---ではサーカス学校の利点があるとしたら、何ですか。

オーベリ 現在ヨーロッパにあるサーカス学校を系統分けるとすると、それは、フランスのCNACという学校に代表されます。CNACが、最近のヨーロッパのサーカス学校の元祖だからです。そこでは、サーカス的な技術だけでなく、ダンスやクラウンやアクロバットなど雑多なことを学べる。でもたとえばロシアの学校を見てみると、

普通はサーカスの技術しか教えませんし、よくてバレエがそこに加わるくらいでしょう。

だから特にヨーロッパのサーカス学校の利点は、ジャグリング以外の技術にも興味を持って挑戦できる、ということですよ。

もう一つの大きな利点は、練習のために全ての時間を捧げられるということです。普通の学校に通っていたり、仕事をしていたら、そういうことはできません。サーカス学校にいれば、練習が、自分の「やるべきこと」になります。

---あなたが卒業したDOCH、これどう読むんですか？

(笑) 「ドッホ」ですか？

オーベリ 「ドック」ですよ。Dはダンス、Oはアンド、Cはサーカス、Hは大学という意味です。私が在籍していた当時は、まだサーカスのセクションが別の一個の大学でした。それが、ダンスだけの大学だった当時のDOCHと合併して、今のような、どちらも教える学校になったんです。

ジャグリングってなんだろう

---ところで、ジャグリングはアートだと思いますか？

オーベリ 「アートであってもいい」程度だと思いますよ。ジャグリングでは何をしてもいい。アートにもなり得るし、フリスビーのような社交性に富んだゲームでもある。健康にもいいですし、スポーツとして競うこともできます。必ずしもジャグリングがアートである必要はない。

---ゴーストキューブはジャグリングですか？

オーベリ それに答えるなら、まず「ジャグリングとは何か？」という問いに答えないといけない。でもこれは「アートとは何か」という問いにも似て、議論の余地が多分にあって、答えるのは難しい。それでもなお、この質問に対する答えを得たいならば、少ないながらもいくつか方法があります。

一つ目に、「ジャグリング」という言葉の意味を辞書的に調べるとのこと。

二つ目は、街に出て一万人に「ジャグリングとは何か？」と聞いてみて統計を取ってみること。すると、人間が、「ジャグリング」という言葉を聞いたときにどうジャグリングのことばのために

いうことを思うのかが明らかになります。前者と後者の答えには、必ず差があるはずですよ。

そして三つ目にできることがあるとしたら、ジャグリング、と名指されるものは、具体的になんであったのかという「歴史」を調査することです。

それぞれ違った答えが得られるでしょう。でもそれら全てが、「ジャグリングとは何か」ということに少なくとも関係のあることです。だからどうにかしてそれら全部を統合することができれば、「ジャグリングとは何か」の理解が深まるかもしれない。

でも昔から「ジャグリングとは何か」ということが議論されてきましたが、私は興味がありません。ジャグリングは生きていて、常に変わり続ける。このような議論はただの議論であって、ジャグリングそのものには何も影響を及ぼすことはありません。ジャグリングに関して理解をもたらしてくれるようなものでない限り、この種の議論は無意味です。

そこで「ゴーストキューブはジャグリングですか？」という元の質問に戻ってみましょう。ゴーストキューブはジャグリングになり得るでしょうが、もし私が、道行く人にゴーストキューブを披露しても、それをジャグリングだとは思ってくれないと思います。でももしジャグラーがゴーストキューブを見たら、ジャグリングと関連付けるだろうと考えます。見る側の判断にもよるでしょう。

デザインとジャグリング

---あなたの得意分野でもある「デザイン」と「ジャグリング」ということばが、結びつけられるような気がしてならないのですが。

オーベリ たとえば、ボールでジャグリングをすると様々なパターンが生まれ、それらのボールの軌跡が視覚的な「デザイン」となって立ち上がってきます。ですがそれは一時的なことで、すぐに消えてしまいます。一度描いたら永遠に残るデザインとは大違いです。イヴァル・ヘックシャー (Ivar Hecksher) という素晴らしいジャグラーがいるんですが、彼はジャグリングのことを「時間芸術」(Time Art)と呼んでいます。なぜならそれは時間の中のみ存在するものだからです。もし私があなたたちにジャグリングを披露するとして、やっている最中のみジャ

グリングは存在し、いったん手を止めてしまうとそれはもう存在しないのです。これが時間芸術です。絵を描く場合は、いったん描いてしまえばずっとそこに存在し続け、時間の流れから独立しているのだからこれは時間芸術とは言えません。こういうことは、デザインとジャグリングということについて関係があるかもしれませんね。

エリック・オーベリのこれから

---ジャグリングについて本を出版したいですか？

オーベリ チンクエヴァッリを5年間研究してきて、2000近くの記事を収集したと思います。最終的には彼について、本や映画といった形で発表したいですね。チンクエヴァッリはジャグリングの革命について語るうえで外せない重要な人物であるにも関わらず、彼について語られているものが今の所何もなく、誰も彼を知りません。カール・ハインツ・ツィーテンの本にかろうじて数行彼について書かれていますが、それでも「いつどこで生まれて亡くなったのか」くらいで。

---あなたはチンクエヴァッリについてについて講義もしていますよね。

オーベリ そうですね、サーカス学校やジャグリングフェスティバルなどでやりました。ドイツ、フランス、フィンランドとかで。

---JIFでもやりましたよね。

オーベリ いや、あれはチンクエヴァッリではなくクラブの歴史ですけどね。

---あつ、そうでしたね。ちなみに彼はピザ回しの歴史を書けますよ。

そいそい ...まあ、いつか書きます(笑)

Bevisという演技

---最新の演目、ベヴィス(Bevis)について教えてください。

オーベリ ベヴィスはもともとジェイ・ギリガンとルーク・ウィルソンが図書館でやるための演目になるはずでした。みなさんご存知のように、その前にルーク・ウィルソンが亡くなってしまいますが、彼が病を患ったあとに私を呼んで、「カノン(Kanon)という演目で自分の代

役を務めてほしい」と頼んできました。私は二つ返事で引き受け、ジェイとカノンを公演しに行きました。ルークが亡くなった後もカノンは少しだけ続きました。

ですがその後私たちはこのショーを終わりにすることを決め、新しいショー、ベヴィスを作ることにしました。ただ、カノンで使った形式は引き継ぎたかった。

カノンとベヴィスの違いは、前者では子供のおもちゃやプラスチックでできたものが多かったのに対し、後者では木製のものが多かったということです。今年の秋にスウェーデンでベヴィスのツアーをする予定です。ベヴィスは、まだ3回しか公演をしたことがありません。ベヴィス自体を作ったのはもっと前なのですが、公演を依頼してくれた側が、今年の秋にやって欲しいということだったので、実際に作り始めた時期と、ツアーをする時期がこんなにもずれているわけです。

---なぜ図書館なんですか。

オーベリ このアイデアはルークとジェイが考えていたものだと思いますが、よく分かりません。ヴィクトル・ギュレンバリ(Viktor Gyllenberg)というジャグラーも関わっていたみたいです。

---ベヴィスとはどういう意味ですか？

オーベリ スウェーデン語で証拠(evidence)という意味です。

---なるほど。色々貴重なお話をありがとうございました。これでインタビュー自体は終わろうと思うのですが、最後に一つ、編集部の中にピザ回しをやっている人間がいるんですよ。

そいそい はい。ピザ回しについてどう思いますか？

オーベリ ああ、これですか？これ実は僕も、持っているんですよ。どうやるのか、教えてくださいよ。



そいそい いいですよ（笑）まず、中心に指を置きますよね。それで指に絡み付かないように……。

（こうして、和やかにインタビュー終了）

（構成・文=そいそい、青木直哉）



photos=Daigo Itatsu

エリック・オーベリ Erik Aberg スウェーデンの名門サーカス学校DOCHを2003年に卒業。1978年、スウェーデン、シェレフテオ出身。数少ない映像作品の発表を通して、世界中のジャグラーに衝撃を与えて来た。なおこのインタビューのあとに、「旅行用に作ったんだ」という、「ゴーストキューブ」のミニサイズを、ほとんどそれだけのために持って来たようなスーツケースから取り出し、衝撃を与えた。いなり寿司が大好き。

参考 JJF2012公式ページ：<http://www.juggling.jp/jjf/jjf2012/jp/guest.html>

【発行人 青木より】

尚、今回のエリック・オーベリ氏インタビューは、ジャグリング用品販売の「ピザ回しドットコム」がエリックのためにボールを製作していた縁から実現しました。

ピザ回しドットコムの店長は、ポンテ編集部のメンバーでもある板津です。

本記事の最後でちょろっと出て来た、またそいそいが本誌で連載を持っている「ピザ回し」の専用ラバー、オリジナルの高品質PMボールなど各種、ピザ回しドットコムで手に入ります。ぜひ。

ピザ回しドットコム

<http://pizzamawashi.com/>

編集部より

たまたま著名なジャグラーが日本にまとめて来ていたため、初めてインタビューを載せました。ポンテでは、以降も国内国外限らず各方面のジャグラーから話を聞いていきたいと思えます。

書くことで、ジャグリングの世界を、いまよりもっと楽しくしよう。

記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、下記のアドレスに連絡をどうぞ。次号発刊は7月5日（土）、寄稿締め切りは前月末の6月30日（月）23:59まで。 ■

juglingponte@gmail.com
ponte 編集長 青木直哉

ポンテは公式ホームページでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://juglingponte.tumblr.com>

[ポンテ編集部員紹介]

編集長 青木直哉（時間を守らない）

ピザ担当 そいそい（絵を描ける）

もじゃ担当 板津大吾（おとな）

の、現在計三人で、活動を進めています。